氏　名（本籍地）	梅田　愛子（東京都）
学　位　の　種　類	博士(文学)
報告・学位記番号	第515号（甲（文）第65号）
学位記授与の日付	2023年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当
学 位 論 文 題 目	梵文『維摩経』のレトリックと偈頌
論 文 審 査 委 員	主査　教授　博士（文学）　渡辺　章悟
	副査　教授　伊吹　敦
	副査　教授　沼田　一郎
	副査　本学大学院非常勤講師 元国際仏教学大学院大学教授 博士（文学）　松村　淳子

梅田愛子氏　学位請求論文（甲）

「梵文『維摩経』のレトリックと偈頌」審査報告書

主査：渡辺章悟

【本論文の位置づけ】

『維摩経』は原名を Vimalakīrti-nirdeśa（Vkn）といい、紀元後１～２世紀にインドで成立したとされる初期大乗経典の代表的作品である。サンスクリット語写本一本、鳩摩羅什訳『維摩詰所説経』の他、支謙訳・玄奘訳の漢訳三本、チベット語訳が現存する。主人公はヴァイシャーリーに住む資産家のヴィマラキールティ(Vimalakīrti、維摩詰と音写され、無垢称などと訳される)で、この在家の主人公が、大乗思想の核心を説きつつ、出家の仏弟子や菩薩たちを次々と論破していくようすが、文学性豊かに描かれていることから、戯曲的な作品であると評されてきた。後述するように、本論文ではこの点について詳細に検討している。

次に本経のサンスクリット本についてであるが、その存在自体は知られていたものの、長い間公開されていなかったが、2004 年にチベットのポタラ宮に所蔵されていた『維摩経』のサンスクリット語写本全文が大正大学から公刊された（『梵文維摩経―ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂―』大正大学出版会）。このことは、この初期大乗経典の解明に大きな意義を持っていたが、その校訂テキストは基本的に古典サンスクリット（Skt.）に改訂されており、もとの中期インド・アーリア語（MIA）的な写本の言語的特色や個性が消されてしまっていた。さらに、このテキストをもとに 2011 年にはサンスクリットからの初めての現代語訳（高橋尚夫・西野翠訳『梵文和訳 維摩経』春秋社）も出版されている。

また、同年には植木雅俊氏も『梵漢和対照・現代語訳維摩経』（岩波書店）を上梓されたが、その中に提示された校訂テキストは厳密とは言い難く、問題も多く指摘されている。これらをはじめ、本経のサンスクリットが刊行されたことにより、研究者の耳目を集め、その思想の解釈をめぐって、新たな評価がなされつつあった。

本論文の筆者梅田愛子氏は、このような状況の中で、あらたな視点から本経を解明すべく、「構造的特徴」と「言語的特徴―偈頌を通して」という 2 つのアスペクトから『維摩経』の特色を明らかにしようと試みている。どちらの切り口にも著者自身の深い洞察の跡が見られ、意欲的な研究であると評価できる。以下はその目次である。

【本論文の構成】

序：『維摩経』の概観
0.1　『維摩経』の成立とその背景
0.2　『維摩経』の構成と概要

本論

第 1 章 本論文の目的と方法
1.1 本論文の目的
1.2 研究方法

第 2 章 Vkn の構造的特徴
2.1 パラドックスと yamakapuṭa
2.1.1 yamaka の概観
2.1.2 advaya（不二）と advayapraveśa（入不二）—その機能と特色
2.1.2.1 advaya の概観
2.1.2.2 「入不二法門品」の教説（言葉としての yamakapuṭa）
2.1.2.3 小結
2.1.3 様々な二面性（設定としての yamakapuṭa）
2.1.3.1 主人公・ヴィマラキールティの二面性
2.1.3.2 釈尊の仏国土の二面性、そのサハー世界と他世界の対比
2.1.3.3 ヴィマラキールティを中心とした物語とシャーリプトラを中心とした物語の対比
2.1.3.4 小結
2.1.4 交錯配列的構成（構成としての yamakapuṭa）
2.1.4.1 場面の交錯配列的構成
2.1.4.2 教説の交錯配列的構成
2.1.4.2 小結
2.2 Vkn の戯曲的構成と特色
2.2.1 はじめに
2.2.2 ラサ（rasa）の理論と Vkn
2.2.3 連結（saṃdhi）の理論と Vkn
2.2.4 小結
2.3 まとめ

第 3 章 Vkn の言語的特徴 —偈頌を通して—
3.1 はじめに
3.2 韻律分析、テキストの校訂とその和訳
3.2.1 第 1 章、第 1～15 偈
3.2.2 小結
3.2.3 第 7 章、第 1～42 偈
3.2.4 小結
3.3 まとめ

結論

付録 A：第 1 章＆第 7 章、梵蔵漢対照テキスト、梵文和訳
付録 B：『維摩経』に関する先行研究一覧

【本論文の内容分析】

上記のように、本論文は「序論」と「本論」（3 章）と「結論」、及び二つの付録から構成されているが、その中心は本論の第二章「維摩経の構造的特徴」と第三章「維摩経の言語的特徴 —偈頌を通して—」である。このうち、第二章の「構造的特徴」についてであるが、著者は維摩経の最後の「嘱累品」（epilogue）にある、「対句や反語を引き出す章句を盛り込んだ（yamaka-puṭa-vyatyasta-nirhāram）経巻」という語句に着目し、インド文献やパーリ仏教文献に見られる yamaka(一対 pair)の用例を取り上げ、その意味を分析している。

この語は「反対の意味を持つ語を対比させる論法」として知られるが、この yamaka が『維摩経』「入不二法門品」で多用され、dvaya（二）と advaya（不二）が不二であることの論証に使われいることも明らかにしている。そのモーメントは samāropa (superior position 増益)と呼ばれ、まさに 18 世紀末～19 世紀初めのドイツの哲学者ヘーゲルの弁証法の「止揚

Aufheben」の概念に酷似しており、興味深い。また「入不二法門品」において、ヴィマラキールティを見舞いに来た 31 人の菩薩が、不二について答える内容（言葉）も、すべて dvaya（二）であり、維摩によるその否定が advaya（不二）、かつ dvaya（二）と advaya（不二）も二である、即ち dvaya=advaya 入不二であることを明らかにしている。

さらに、『維摩経』の素材に見られる様々な相対する二面性（双 yamaka）、たとえば主人公である維摩の二面性、釈尊の仏国土の二面性、サハー（娑婆）世界と他世界の対比、維摩を中心とした物語とシャーリプトラを中心とした物語の設定に見られる対比を指摘し、その対比の構造、あるいは＜双神変 yamaka-prātihārya＞が衆生（特に声聞・阿羅漢）の教化に結び付いているということを指摘している。この点は、筆者の独自の考察であり、本経の思想を語るうえで示唆的である。

また、梅田氏は Orsborn(2016)の示唆にヒントを得て、「交錯配列的構成：構成としての yamaka-puṭa」が『維摩経』の構成の中に成立しているかを検証している。その結果として完全な対称は見られないものの、ほぼ完全に近い交錯配列的構成を為していることを明らかにしており、『維摩経』編纂者の粋な意図が垣間見られるとする。

最後に『維摩経』の構成上の特色として、戯曲的特色を取り上げている。経典ではあるが、全体を通して場面の変化、ストーリーがあり、登場人物が「話す」というところから、特に戯曲的あるいは演劇的という印象は誰も否定しないであろう。ただ、例えば Jonathan Silk が主張するように、この事実をギリシャ古典のアリストテレースの演劇論と関連させて理解することが正しいかどうかについては疑問を呈し、やはりインドの伝統的演劇論やラサ理論に照らして検証しようと試みており、それ自体は意欲的な取り組みであると思う。

具体的には『維摩経』の戯曲的特色について、現存最古であり、紀元前後の数世紀の間に編纂されたという、バラタ仙（Bharata Muni）作『演劇典範』（*Nāṭyaśāstra*）における記述を参照しつつ、インド美学の根幹を為すラサ（rasa）や戯曲の骨組みとなる連結（saṃdhi）の理論を中心に分析している。

しかし、この連結（saṃdhi）の理論と『維摩経』との比較では、その本文の中で、連結に相当する言葉として「完結」（nirvahaṇa, conclusion）という言葉しか現れないし、戯曲のプロット・モデルに必ずしも適合しているとは言えない。おそらくジャータカ物語で過去物語の登場人物を（釈迦仏の）現在の物語の登場人物と結びつけることを sandhi という語で表すので留意してほしい。また、インド演劇の五幕以上、十幕以内という規定の中に本経の構造（幕場）を当てはめて解釈するが、これも本経が演劇論に沿った構造に基づいて構成されていることが前提の議論である。試みとしては面白いが、実際にそれを証明することは困難であろう。

次に、第三章の「言語的特徴―偈頌を通して」では、『維摩経』第 1 章の 15 偈と第 7 章の 42 偈の韻律分析やテキスト解析が行われている。偈頌には古い語形が残されやすいことから、この箇所に限って分析の俎上に挙げたのである。ここに述べられる論述こそ、筆者の最も力を尽くしたところであろう。以下は筆者による本論文の記述から要点をまとめてみたい。

まず、第 1 章の偈について、前半の第 1 偈から第 8 偈までは 14 音節からなる Vasantatilakā（Vasant.）である。これは先行研究でも言及される通りだが、『維摩経』のそれは長音節の resolution（2 単音節で 1 長音節に変える）が多く見られ，また韻律に合わせるための語尾の省略または不正規な語形の多用など、自由度が高く、正規の Skt.で固定された Vasant.とは違うという。残りの第 9 偈から第 15 偈までは、パーリ語経典やその註釈（アッタカター）文献に見られる 11 音節と 12 音節（Triṣṭbh/Jagatī）の混合詩節に近いものである。すなわち、Opening は第 1 音節には自由度があり（⏑，–，または，⏑⏑），2〜4 音節は「– ⏑ –」の弱強格のリズムに固定されている（x – ⏑ –）。Cadence の「– ⏑ – ⏑̲」ないし「– ⏑ – ⏑ ⏑̲」は規則的である。Break に「⏑ ⏑ –」が出ないのは特徴的で、大部分「– ⏑ ⏑」であり、「⏑ ⏑ ⏑」も多い。また、Prākrit（Prā.）から正規の Skt.化された形跡も随所に見られる。

第 7 章の偈については Śloka で書かれており、基本的には正規形である pathyā であるが、所々に非正規形の一つである ma-vipulā が見られる。これも正規の Skt.の固定された ma-vipulā とは違い、特に a/c pd.前半は「x – ⏑ –」に定まっておらず、自由度が高く、パーリ語経典やアッタカター文献に見られる ma-vipulā と酷似している。全体的に resolution も多く見られ、また鼻音を ṃ で代用したり、逆に次にくる音と閉鎖位置を同じくする鼻音に変化したりと、より口語的で中期インド語（MIA）的な箇所が多く散見される。正書法上の規範にルーズな面も見られ、かつ同時に、Prā.から正規 Skt.化された形跡も随所に見られる。

また、両章の偈頌を通して、「母音+r」の後の子音の綴りが二重になったり、鼻音の後の口蓋音（palatal）の[ch-]が[cch-]になったり、綴字上の個性が認められる。さらに、語頭の二重子音は単子音であった可能性が高い。もともと MIA 段階の言語で作られていた詩を基に仏教梵語（Buddhist Sanskrit）化した偈頌であることは間違いない。

これらの偈頌は、他の大乗経典によく見られるような散文の概要を韻文で繰り返し詠うものではなく、物語の中で登場人物の台詞として登場する。『維摩経』第 1 章の偈頌は、釈尊のもとを 500 人の同胞と共に訪れたリッチャヴィの少年菩薩・ラトナーカラが、釈尊の起こした大宝傘蓋の神変を見て、仏を讃えるために詠った讃仏偈である。第 7 章での偈頌は、章の最後を飾っており、維摩がサルヴァルーパ・サムダルシャナ菩薩に維摩自身の家族や眷属などがどこにいるか問われ、維摩の回答として詠われるものだが、実際の回答内容は、維摩個人のことではなく、家族や眷属に見立てた菩薩の資具についてであったり、菩薩行についてであったりする。

讃仏偈自体は仏典に珍しくないが、戯曲的特徴から鑑みても、序幕で舞台の成功を祈り神々に讃歌を捧げることが習慣なので、第 1 章で讃仏偈があることはこの点から鑑みても興味深い。

以上、筆者の論述にしたがって『維摩経』の偈頌の特徴をあげてみたが、これらの分析は筆者によってはじめて指摘されたものが多く、その分析は非常に有益である。

ただ、古典サンスクリットの韻律は韻律学の教本により韻律は正確に規定されているが、古典サンスクリット以前の中期インドアリヤン語（MIA）や仏教サンスクリットの韻律につ

いては、確かな規則というものはない。それらの韻律については、現存するテキストから知られる偈頌の分析から帰納的に知られるものであることを念頭に置かなければならない。

そのような背景がある以上、テキスト校訂については、写本が一つだけなのか、それとも複数の写本があるのかなど、写本をめぐる外的・内的証拠を勘案して適切な校訂方針を立てなければならないが、『維摩経』のように写本が一つだけという場合、古典サンスクリットの規範と韻律に反する語形や sandhi 等をそのまま古典サンスクリット語の規範に合わせてしまうということは、厳に慎まなければならない。

筆者はその点をよく踏まえて、「今ある写本の個性を可能な限りそのまま残すようにしたほうが良い」（p.43）と述べている。それに従って最小限の変更のみをイタリックで示し、その他の場合はその都度、説明を加えている。ただ、この方針がところどころで揺らいで、サンスクリット化へと引きずられている箇所も見受けられる（例：p. 47, 21 大正大校訂版に従い、svara を śvara と改める）。この場合、śvara を svara とするのは、MIA の特徴であり（サンスクリットの ś, ṣ, s という 3 つの sibilants は、MIA では一つの sibilant に統一されている）、それを知っていれば訂正する必要がなく、『維摩経』の仏教サンスクリットの特徴の一つとするべきであっただろう。ただ、こうした本文批判については、インド学の分野では教わる機会が少ないので、仕方がない面はある。そもそも写本校訂や韻律の研究はヨーロッパの古典学・聖書学から始まっているので、日本のインド学・仏教学の研究者にとっては不得意なのはやむを得ない。しかし、すべての偈頌についてできるだけ原文を変えずに説明しようとした努力は大いに評価することができる。

最後に、本論文の構成であるが、本論文の最大のボリュームを占めるのは、付録に位置づけられた二つの業績である。特に付録 A は本論「第三章」の維摩経の偈頌すべてが収録される第 1 章 15 偈と第 7 章 42 偈の韻律分析とテキスト解析を行い、サンスクリット文の校訂を提示している点は学問的な貢献という意味で最も重要である。このような本格的な偈頌の分析は仏教梵語に精通したものでも簡単になしえるものではない。さらにそれに対する自らの日本語訳とそれらの偈頌に対するチベット語訳と漢訳三本(支謙訳・羅什訳・玄奘訳)の対照テキストを作成している。言うまでもなく、このような語学的基礎研究のもとに本論の言語分析があるのであり、その重要性は言を俟たない。

また、その分量もこの付録だけで約 150 頁（A4）にのぼり、本論文 314 頁の半分ほどを占めているように、質量ともに極めて有益で大きな業績なのである。むしろ付録にせず、本論の第 4 章に組み入れてもよかったと思う。

さらに最後の付録 B も全 60 頁ほどにわたって、これまでの世界の維摩経研究に関する先行研究がほぼ漏れなく収録してあり、この分野に関するきわめて有益な業績と言えよう。

【結論】

以上、梅田愛子氏の本論文は、サンスクリット等の言語能力に裏付けられた高度な専門性を有する意欲的な論文であり、学界に対する貢献度も十分に認められる。本論文の貢献は二つある。一つは『維摩経』の思想的解明であり、もう一つは本経の言語的特性の解明である。

前者はその思想が、本経の副題にある yamakapuṭa というパラドクシカルな構造によって構成されており、梅田氏のいうところの「交錯配列的構成」をなしていることを明らかにしたばかりか、その yamaka という対立構造が、二（dvaya）と不二（advaya）であるところの論証に使用されていることを解明している。また、本経の戯曲的構成をインドの伝統的演劇理論の立場から解明しようとしている点は創造的であり、意欲的である。このような主張は完全に成功しているとは言えないが、これまでの維摩経研究とは明らかに異なる独創性を有している。

後者は本経の言語的特性の解明であるが、梅田氏が扱った偈頌の分析は、従来の仏教学でも十分に解明されている研究ではなく、これまで不十分であった中期インドアリヤン語（MIA）を代表する仏教梵語の特性が、少なくとも『維摩経』に関しては一段階推し進められたといえる。この論文によって今後のこの分野の研究にとって一つの目安のなる業績になったと評価する。

また、本論文は文学研究科（インド哲学仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても十分に妥当な研究内容であると認められる。

よって本審査委員会は、梅田愛子氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査結果に基づき、全員一致で本学博士の学位を授与するにふさわしいものと判断する。